

手紙

茶屋町小学校の難波先生から手紙が届いた。社会科の全国大会の発表が無事すみ、わたしが、形ばかりだけでも指導の役割をしたことへの感謝の気持ちが記されていた。通知表や学期末の事務処理で忙しい時に、細やかな気遣いでとてもうれしく思った。

初任の時の教務主任、竹内先生が社会科の人で、その人について社会科の勉強をした。当時の真備町は、教科別の小教研は組織されてなくて学年別の研修会が開かれていた。そのため、真備町で県社研に所属していたのは、竹内先生と大久保先生とわたしの三人だけだった。中国大会、県大会、実践発表会や合宿研修会の発表は、地区輪番で来るので、大久保先生とわたしが交代で発表していた。そのおかげもあって、30歳くらいまでに主だった研修会の発表を経験することができた。ただ、たった三人だけの社会科部会なので、授業づくりはみんなで考えてなどといった悠長なものではなく、一人で実地の資料集めに奔走し、書籍を繰り返し読み込んで必死の思いだった。それに比べると倉敷市社研は大所帯で、理論構築はブレーンの教頭や教務がし、授業づくりは何人ものグループで練り上げ、授業は組織の中でも選ばれた実践家が行っていた。その組織の充実ぶりをねたましく思いながらも、倉敷に負けたくない恥ずかしい思いはしたくないとの思いで懸命だった。

教頭になり、学校の運営に携わるようになると、自分の興味に時間と集中力を割くことは、教頭としての覚悟が決まっていなと思うようになった。以来、15年ほど県社研の活動からは遠ざかっていた。おとし、県社研の会長の浅井先輩が、「横山、夏の合宿研を倉敷の広江クラブでするのだけど遊びに来ない？」とさそいの電話があった。昔の仲間に会ってみたいという思いと、夏季休業中の研修ということもあって参加することにした。行ってみると遊びどころか指導・助言と受付名簿にある。大変驚き、汗をふきふきの指導・助言になったが、心踊るほど楽しい二日間になった。このことをきっかけに、倉敷市社研に関わるようになった。琴浦南小の三木先生のはからいで、全国大会の指導・助言もさせていただいた。

倉敷市社研は、以前から比べると組織は小さくなってはいるが、若いころに憧れの気持ちで見つめていたとおりの組織だった。若い先生も多く、皆が真剣に社会科と向き合っていて、自分の考えはしっかり主張できるが、相手の立場や考え方にも理解を示そうとする。その気風は昔とかわっていない。三人だけの真備町社会科部から出発したわたしが、倉敷市社研のメンバーとなり、若い先生から感謝の手紙を受け取ることなど、三十年前の自分には想像もできなかったことだ。

自分の置かれた立場や環境をうらむことなく、自分ができることを地道に行っていくことが、将来思わぬ喜びをもたらしてくれるとあらためて思った。難波先生、お手紙ありがとうございました。